



ごあいさつ

このたびミウラート・ヴィレッジにて「世界が絶賛した海中芸術 伊東昭義展」を開催いたします。

ここ四国の地に於いて初となる、世界が絶賛した伊東昭義の海中芸術を御紹介できますのは当館にとりまして誠に光栄なことでございます。米国立スミソニアン美術館やユネスコで日本人として初めて個展を開催し、異例の観客動員数を果たすなど、その独特の芸術性は世界的に高い評価を得ております。

伊東昭義は日本大学芸術学部卒業後、プロの彫刻家として斬新で創造性に満ちた作品を発表するだけでなく、絵画や陶芸などあらゆるアートに深い関心を示してきました。元新聞社のカメラマンであった父から受け継いだ資質と子供の頃からの自然との深い結びつきが伊東芸術の源であり、さらに海中芸術へと昇華されていきました。彼の芸術のコンセプトは自然の持つ力とアートによる力を融合させ、海中の美の本質に迫った写真芸術ですが、その根幹には環境を破壊し続けて来た人類への警鐘も込められております。

これまで海中を訪れたことが無かった多くの人は、そこに存在する色彩の豊かさや多様な生物の生態に気付くことは無かったでしょう。本会場に於きましては、鮮やかで美しい作品群が浦島太郎となった観覧者の皆様方を竜宮の海への旅に御案内致します。

ミウラート・ヴィレッジ

伊東昭義の生い立ちから現在まで

元大手新聞社のカメラマンであった伊東昭義の父信義は、愛馬にまたがり、時には愛馬をハーレーダビッドソンに乗り換えて荒野を疾走する冒険家でもあった。

また、絵を描き、書道をたしなみ、カメラを製作したり、当時自家用車が珍しかった時代にロールスロイスを自分で整備しながら乗り回していた。

さらには、小学校の体育館を買い取り、巨大写真スタジオに改装して新境地を切り拓いたかと思うと、一転して土木事業に進出し、道路を拓き、橋を架けることに情熱を燃やしていた。信義は職業に垣根を作らないクリエイターであった。つまり、文化人と起業家としての才覚を兼ね備えた人物だったようである。伊東昭義はその父親の血をそっくり受け継いでいた。幼少の頃の伊東は郷里(金沢)の山河を駆け廻り、海に潜り、一年中自然を相手に格闘していた。正に自然児そのものであり、彼の思想の構築に重大な影響をもつことになる。一方、家の中にはプロ用カメラが何台も置かれていて、小学生の伊東にとってのカメラはおもちゃ代わりに、写真が特別な存在ではなかったようである。小学4年生の頃は絵の才能が芽生え、画家になることを宣言して周囲を驚かせ、中学生になると彫刻に目覚め、全国大会でグランプリを取るなど頭角を現わすこととなる。それら数々の賞状を父親が壁一面に画鋏で留め、親バカとも言える記念撮影をしたが、学校から帰るとそれらの賞状は、2階の窓から花吹雪のように撒き散らされていた。そのことを問い正すと、一言「賞に頼る人間になるな」であった。画家への志も高校生になると陶芸家の道へと変貌し、在学中に北陸現代展にて早くも作家デビューを果たしているが、ヘンリームーアの『彫刻』との出会いが、その後の人生を大きく決定づけていった。大学卒業と同時に美術研究所を設立し、彫刻家としての華々しいスタートを切り、有名美術団体でのグランプリや、現代日本美術展への出品へと踏み



絢爛

出していきが、それらは同時に『賞に頼らない生き方』を思い起こさせることでもあった。芸術という枠に納まりきれない伊東の創作意欲は、以後、芸術以外への社会貢献を模索することになる。折しも、都市化とモータリゼーションの波は、子供たちから遊び場を奪い、人間の存立基盤と言うべき『運動能力や体力』を低下させ、人類が築いてきた対自然観さえも歪めてしまうことを危惧した伊東は、未知なる教育分野である『幼児体育』の創始者として、クリエイショナルなアプローチを展開させることになる。幼児体育の方法学(運動処方と指導体系)は伊東昭義の思想体系へと組み込まれ、日本全土に影響を与えてきた。幼児体育を世に送り出した伊東は、『生命の源流と美の本質』を壮大な海に求めて、真の芸術への探求を開始する。なにかに導かれるように沖縄の海と出逢うことになった伊東は、かつてない衝撃を受けることになり、以後、伊東は

沖縄から世界の海を巡り、その新たな思想の展開と集約が『美術写真』という領域に先鞭をつけることになったのである。『彫刻』に始まり、『幼児体育』から『海中芸術』へと続き、伊東の宇宙は、自然に対する大いなる畏敬の念と、普遍の愛や美意識で見事に統一されることになったのである。それは、生命の源である海中の生きものたちの美しさを芸術に封じ込めた、青い地球(ホシ)の記録でもある。国内の美術館やデパートから、米国立『スミソニアン美術館』・フランス国立『ポルトドレ宮殿ギャラリー』・イタリア国立『アリナリ写真美術館』での個展を経て、『ユネスコ』(国連・教育科学文化機関)展へ…。それは、ユネスコが認め、世界のメディアが絶賛した伊東芸術そのものであり、そこには、『美術写真』という未踏の頂への長い道のりがあった。



プロフィール

伊東昭義 Akiyoshi ITO
日本大学芸術学部美術学科(彫刻専攻)卒。
現在、美術家(彫刻家)として世界的に活躍している。
彫刻の傍ら海中の美の探求者となった伊東は、やがて「海中の色彩の発見者」と評されるようになり、海中世界を芸術に昇華させ『美術写真』と言う新ジャンルを確立させた世界初の作家となった。それらの作品世界は「偉大な自然の力」と「人間創造力」の結晶を純粋美術のカテゴリーに封じ込めたものであり、その先駆者としての芸術性は多くの人々に感動を与え続けており、欧米の『国立ミュージアム』において国際的評価を得てきた。
2015年、伊東昭義は、ユネスコ(国連・教育科学文化機関)にスペシャルゲストとして招聘され多大な功績を残すことになった。ユネスコ加盟国195カ国からワールドオーシャンズデイの会議に参加した国王や政府代表者、有識者を含め約1200名の人々の注目を集め絶賛されることになった。さらに、国際性豊かなユネスコ職員約2000名や、ユネスコ大学の学生、ユネスコ保育園の園児、それに一般参加者を加え『地球が愛おしくなる』…と言わせるほどに、大きな感動を残すことになった。それは芸術の持つ力が世界を一つに結び瞬間となった。

- 1994年 『伊東昭義の世界』 於:東京芸術劇場
- 1995年 『沖縄の美しき水中世界』沖縄戦後50年記念巡回展 於:JALホテルグループ5社
- 1998年 『フィリピン独立100年記念展』 於:関西国際空港 (後援:フィリピン観光省)
- 2000年 『沖縄サミット記念展』-奇跡の海・沖縄- 於:リウボウホール (後援:外務省)
- 2002年 『伊東昭義・海中アートの世界』 於:リウボウ美術サロン
- 2003年 『伊東昭義・海中ミュージアム』 於:笠間自動美術館
- 2004年 『伊東昭義・竜宮の海』 於:渋谷東急本店
- 2005年 『伊東昭義・米国立スミソニアン展』 於:スミソニアンS.Dillon Ripley Center International Gallery
- 2006年 『伊東昭義・竜宮伝説』 於:酒田市美術館
- 2007年 『伊東昭義・竜宮物語』 於:しもだて美術館
- 2012年 『伊東昭義・国立ポルトドレ宮殿・ギャラリー展』 於:フランス・パリーフランス文化省招聘
- 同年 『伊東昭義・アリナリ国立写真美術館展』 於:イタリア・フィレンツェ
- 2013年 『伊東昭義・波の下の奇跡』 於:伊東昭義美術館
- 2014年 『伊東昭義・龍宮伝説』 於:伊東昭義美術館
- 2015年 『伊東昭義 inパリ・ユネスコ展』 於:UNESCO(国連・教育科学文化機関) (後援:フランス政府・モナコ公国・ユネスコ日本政府代表部・日本ユネスコ国内委員会)
- 同年 『伊東昭義・教育巡回展』をユネスコ日本政府代表部により作品を無償にて貸し出しを開始
- 2016年 『伊東昭義・ユネスコ展開催記念展』 於:伊東昭義美術館 (後援:フランス政府・モナコ公国・ユネスコ政府代表部・日本ユネスコ国内委員会・沖縄県)

主な著書に『K'ケルビン/生命の色温度』(風鳴堂書店 1994年)、『からだところを創る幼児体育』(日本放送出版協会 1995年)、『奇跡の海』(光村推古書院 1999年)、『奇跡の海・沖縄』(光村推古書院 2000年)、『龍宮の海』(求龍堂 2010年)、『海には海の詩がある』(角川学芸出版 2010年)などがある。

表紙作品:時を止めて

伊東昭義展

世界が絶賛した海中芸術

2017年6月18日(日)~8月20日(日)

休館日:月・火曜日(祝日は開館)

開館時間:午前9:30~午後5:00(入館は午後4:45まで)

開館イベント:2017年6月18日(日) 午前10:30~12:00

開展式
伊東昭義氏による講演会
松本彩氏によるハーブ演奏会
※事前申込不要。入場料のみでご参加いただけます。

次回展覧会:**丸山晩霞展(水彩画)**
2017年9月3日(日)~10月22日(日)

アクセス
◆JR松山駅より市内電車にて松山市駅へ、伊予鉄バス北条行き「内宮/バス停」又は「花見橋/バス停」下車 徒歩約10分
◆松山空港より約11km ◆松山I.C.より約16km ◆今治I.C.より約35km

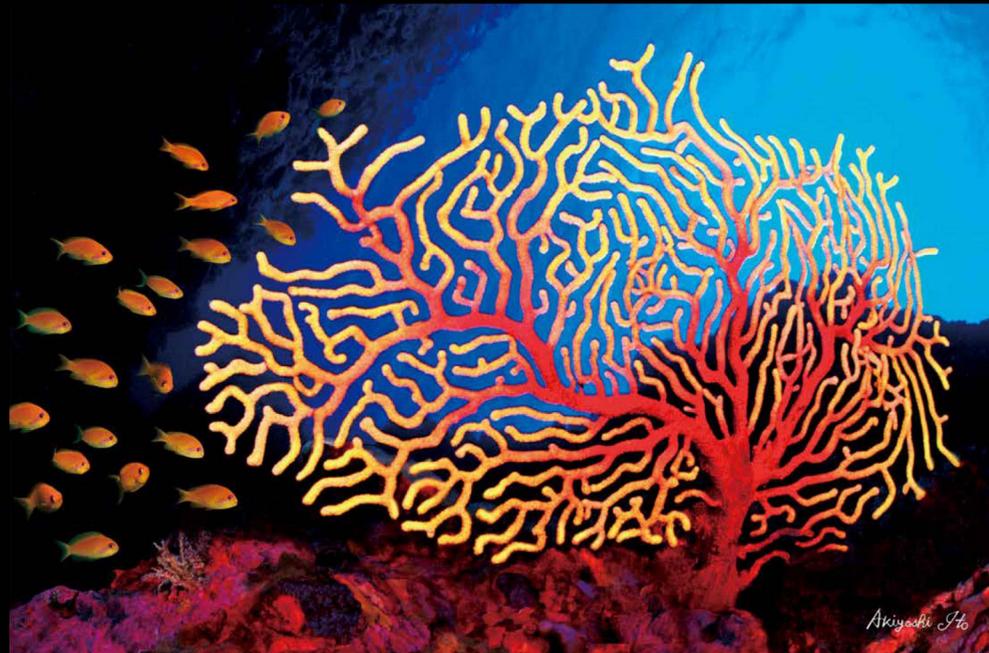
MIURART VILLAGE
MIURART
ミウラート・ヴィレッジ(三浦美術館)

〒799-2651愛媛県松山市堀江町1165-1
TEL089-978-6838 FAX089-978-0323
http://www.miuraz.co.jp/miurart
E-mail:miurart@miuraz.co.jp

駐車場:30台と土・日・祝日は臨時駐車場(三浦工業 福角駐車場約250台)をご利用できます。



新天地



光彩



幻想の銀河

美の源光景

海中で「生命と美の源光景」に遭遇したことは、過去の芸術的概念を一掃する出来事となった。以来、生命の輝きとは何か…あるいは、美とは何かについて新たな探求を始めることになる。美術家(彫刻家)である私が驚嘆したのは、海に潜ることにより得体の知れない複雑な感情を体感したことである。それは、静けさの中に「命のざわめき」が入り混じった不思議な感覚だった。そのことを強いて言葉に直すと、それは『懐かしい』…の一言になるかもしれない。人が海に入ることにより、かつては魚であった時代の微かな記憶が蘇ってくるからなのであろうか…。あるいは、私たち生命の故郷である『海への帰巢本能』の成せる感覚なのかもしれない。

私は『海中の色彩の発見者』と呼ばれてきた。海中の色彩世界は、気の遠くなるような時間をかけて創り出されてきた『命あるものの彩り』で満たされている。そこで私が身をもって体感し、捉えたすべての情景が彫刻家としての造形力を基盤の上に、作品

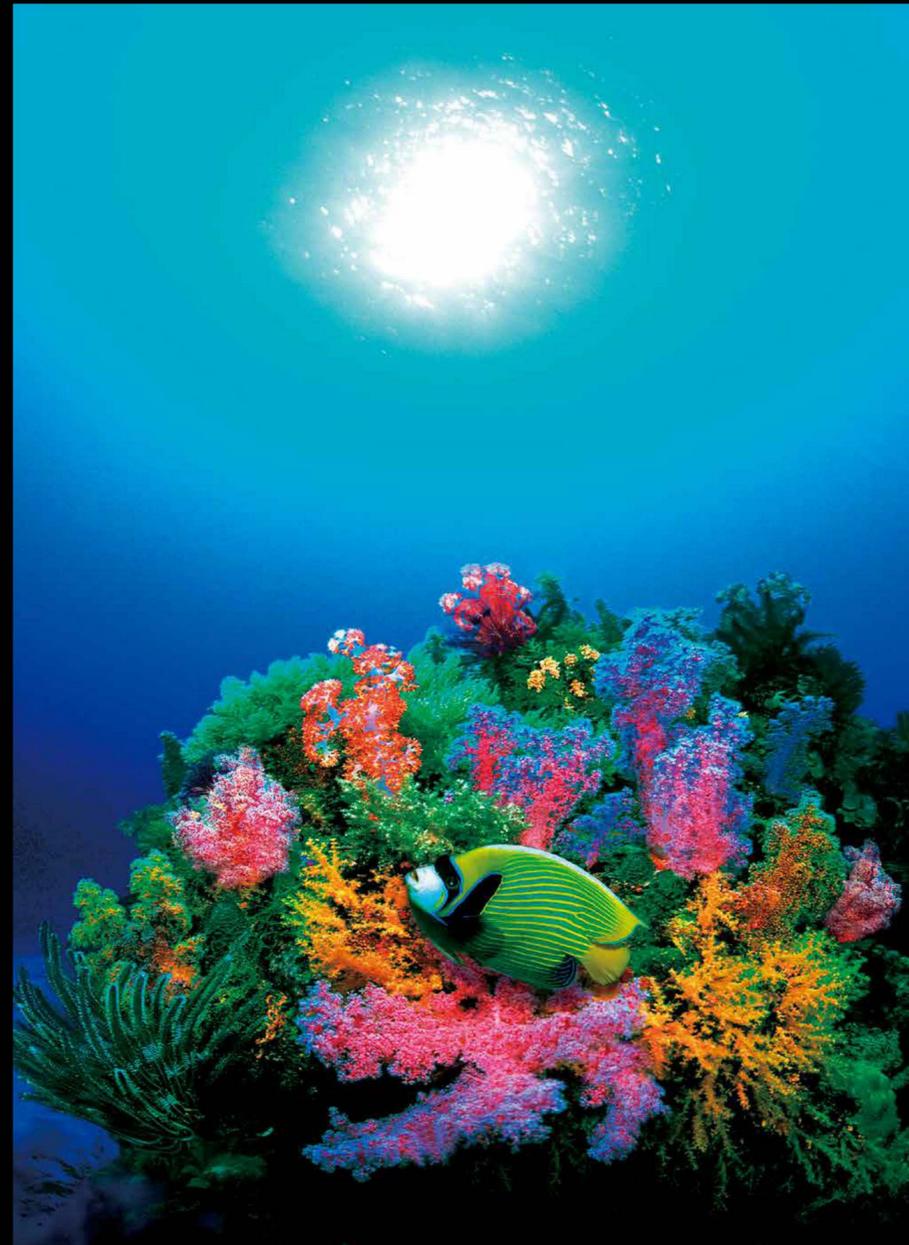


共振

として構築されている。それが伊東アートだと思っている。従って、写真はあくまでも表現手段としてのメディアであり、美術のジャンルを超えて表現する芸術的概念の構築だと考えている。それは、『アートとは何か?』…への問いかけでもあるのだ。美とは『秩序のことである』…と言える。その秩序とは『知性』のことであり、『愛』であり、『宇宙』でもあるのだ。生態系を守り続けている海の生き物たちは、『そこに居るだけで知性を光らせている』。だから、地球の生態系を壊し続け、秩序を乱している人間に、果たして本当の知性が存在しているかどうかは疑わしい。そこには人間の愚かさが常に見え隠れしているのだ。自然が壊れた分だけ人の心が壊れていることに、人類は未だ気がついていないのかもしれない。つまり、複雑に発達した人間の脳(新皮質系)が、その下部に位置する動物の脳(辺縁皮質系)を抑圧し過ぎていることにより、自然界と文明社会との境界線を曖昧にし、現代社会にあらゆる不都合を生じさせているからだ。実は

その境界線は私たちの頭の中に存在しているにもかかわらず、その認識が不足していると思われる。私たちは、アンバランスに発達した脳の誤算を謙虚に受け止める必要があるのだ。私は、生命の根源である海中世界を、芸術を通して『より美しく!より感動的に!』表現することにおいて、環境保全への警笛を鳴らし続けてきた。命がけて制作に打ち込めるのは、それらの作品が大人のみならず、明日を担う子供たちの心に響くことができ、彼らの人格形成の一部に資することにある。そのことが私の願いでもある。刻々と悪化の一途を辿る地球環境に身を置く私たちは、今、大きな岐路に立たされている。人々が、『美しいものは美しい!』…と、素直に言える心のゆとりを取り戻したときに初めて、人類は進むべき道を模索し始めるのかもしれない。美とは秩序のことであり、愛であり、宇宙だからだ。

伊東昭義



奇跡の彩り